

# 世界文化遺産を生かした実践

函館市立大船小学校 学級数4 (校長 松浦 宏)

## I 実践テーマの趣旨

本校は、今年7月に世界文化遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つである「大船遺跡」の近隣に位置している。「大船遺跡」は、各学年の教育活動や津波を想定した避難訓練の避難場所であるなど、大船小学校の児童にとって非常に身近な場所であることから「大船遺跡」を活用して、縄文文化への理解を深める教育活動を推進している。

## II 実践の概要

本校は、学校経営の重点を「地域の特性を生かした教育活動の推進」とし、縄文文化に係る学習や教育活動を教育課程に位置付けて取り組んでいる。

### 1 社会科における学習との関わり

小学校第6学年社会科「国づくりへの歩み」の単元の中で縄文時代について学び、その後、「大船遺跡」で「縄文のにわ」や「管理棟」を見学している。

「縄文のにわ」では、復元された竪穴式住居の中を見て、児童は、「教科書のイラストでイメージしていたより広い」と声を上げていた。

また、遺跡から見下ろす海を見て、「縄文時代の人は、この海で漁を行っていたのだろう」と思いをはせている児童もいた。

「管理棟」では、出土品を見て、「大昔のものが今も残っていることがすごい」と感心していた。

このように、教科書で学習した内容を実際に見学することで、先人の工夫や努力、自分たちの生活や文化の源流について具体的に理解し、我が国の歴史や文化に興味・関心をもって学んでいる。



【竪穴式住居の見学】



【「縄文土器」作り】

### 2 生活科における学習との関わり

小学校第1学年生活科「あきをさがそう」では、「大船遺跡」で当時の環境が再現されている「縄文の森」を散策し、たくさんの栗や山葡萄を見付け、「昔の人も取って食べていたのかな」と想像をふくらませている。

また、大船遺跡へ向かう坂の上から海を見て、「この景色が、いちばん好き」と美しい景色に心ひかれる場面もあった。

このように、身近にある大船遺跡での体験活動を通して、自然の様子や四季の変化を感じ取っている。



【「中空土偶の顔」作り】

### 3 学校全体としての取組

毎年、多くの児童が縄文絵画コンクールに応募するとともに、冬には全校児童で、生活科及び総合的な学習の時間に縄文文化交流センターを訪れ、縄文文化に係る体験学習を行っている。

体験学習では、近年「中空土偶の顔」「縄文土器」「勾玉」作りを体験している。児童は、熱中して取り組み、完成すると自分の作品に満足し、笑顔を見せている。

制作が終わると、展示室で「国宝『中空土偶』」を見ることができる。

昨年度は、実物を見ることができ、初めて見た第1学年の児童は、荘厳な雰囲気の中空土偶を前にして、緊張しつつも感動し、「すごいね」「写真よりきれいな色だね」と話していた。



【中空土偶の顔】

## III 実践の成果(○)と課題(●)

- 世界文化遺産に登録された「大船遺跡」に直接足を運んで見学や体験などの活動を通じて我が国の歴史や文化、自然への関わり方を一層深めることができた。
- 本校は、令和4年3月で閉校となることから、統合先の南茅部小学校においても地域について深く学び、南茅部地区に対する誇りと愛情を育む教育活動を継続していく必要がある。